



武辺のわび — 寸切竹花生 —

茶人は、竹の花生をことのほか尊重します。数ある茶道具の中で、竹花生は竹の茶杓とともに、茶人が自ら切るか墨打をして作らせるか、いずれにしても茶人の創意が作品に直接反映しているからでしょう。

ここで紹介する竹の花生は、江戸時代前期の大名茶人片桐石州自作のもので、1尺(約30cm)余りの竹のほぼ中央に一節を残し、上下を切り放しただけの寸切形です。竹の表面には、節でかろうじて止まった一条の雪割れがあり、そこに打たれた鋸の補修が、新たな景色(鑑賞の見どころ)となっています。雪割れから染み込んだ

水は、大きな黒い斑を生じていますが、それがかえって枯淡な味わいを見せます。底は一度鋸で切断したのち、周囲に鋸目を加えています。いかにも武將茶人らしい力強さの演出です。

片桐石州は、豊臣秀吉の家臣で賤ヶ岳七本槍の一人として勇名を馳せた片桐且元の弟貞隆の二男。慶長10年(1605)摂津の茨木(現在の茨木市)に生まれ、父の死後に大和小泉(現在の和歌山県和歌山市)の藩主となりまし。彼は幕府の普請奉行として京都知恩院の再建など、各地の土木行政や作事にあたる一方、4代将軍家綱の茶



寸切竹花生 片桐石州作 (彦根城博物館蔵)

道師範を務め、天下の茶頭として活躍しました。石州が標榜した茶の湯は、わび茶の大成者千利休の茶道を踏まえ、武士風のわび茶を追求した「武辺のわび」でした。その理念は、大名をはじめとする武家社会を中心に、石州流として広く支持されていきました。

彦根藩主井伊家には、数多くの茶道具や茶書が伝来してきました。その多くが石州流にゆかりのもので占められています。多くの大名がそうであったように、井伊家でも歴代の藩主が石州流を基本に、茶の湯をたしなんだようです。なかでも茶の湯の精進にもっとも努めたのが、13代藩主井伊直弼です。

直弼は、幕末の大老として政治史の上でことさら著名ですが、じつは当代を代表する大名茶人でもありました。彼は15歳のころから彦根の茶人について石州流を学びますが、茶の湯の研究が進み、時流の説くところには飽き足らなくなつた彼は、やがて江戸の石州流の茶匠片桐宗猿に書面で尋ねるようになります。茶の湯について不明な点を簡潔書きにして示し、師の宗猿は付け札で回答する。このような尋ね書が16通伝来しています。

こうした研鑽の成果が凝縮されたのが、直弼の代表作『茶湯一会集』です。それは、石州が標榜した「武辺のわび」を、200年の時を経て新たに構築しようとするものでもありました。(囲教育委員会文化財課 谷口 徹)

写真の花生は、彦根城博物館のテーマ展『井伊家伝来の茶道具・花生と水指・建水』で、5月14日から6月15日まで展示します(期間中無休)。